

御嶽信仰を支える人々

— 岩崎御嶽山の事例より —

榊原 奈央子

はじめに

現在、木曾御嶽山を霊山として崇拝する、あるいは「御嶽大神」を主神として祀っている宗教団体は全国で1,000団体以上あるとされる。そしてこれらの団体の下に各御嶽講が存在しているが、団体本部が講に対して持つ統制力はきわめて弱い（池上1991）のが特徴である。

しかしながらこれは、基層組織となる各単位講社が独自の講祖や行法を持ちそれぞれが自立した活動を有しているということの裏がえしでもある。担い手の高齢化による沈滞はあるものの、総体としての「御嶽信仰」が今も維持されているということは、基層になる各講社の活動に御嶽信仰を継承していくための有機的な組織機構や支える人々の“思い”が存在しているはずである。

本稿では、「御嶽信仰」全体の維持に繋がる御嶽信仰の基層組織の実態やそれを支える人々の思いがいかなるものであるのかということ、心願講系の岩崎御嶽山（愛知県日進市）の事例をもとに明らかにしていきたい。

1、岩崎御嶽山の概要

岩崎御嶽山は愛知県日進市岩崎町竹ノ山にある標高134mの小山である。日進市は尾張地域と三河地域の境に位置する名古屋市のベッドタウンである。市北部にある岩崎御嶽山には、本拠地木曾御嶽山（3067m）同様、三笠山・賽の河原・奥ノ院などが存在している。また御嶽信仰に特有で、有力行者を死後霊神として祀った霊神碑が全山を覆い、区画された霊神場が493ヶ所ある¹⁾。戦前の様子を知る地元の人によると、「岩崎御嶽に3回登れば木曾の御嶽に1回登ったことに

なる」とも言われる一大霊場であったとのことである。

『岩崎御嶽山縁起』によれば、名古屋の明寛（出来町、丹羽宇兵衛）・明心（門前町、倉知茂兵衛）両行者が西国三十三番札所巡りに出掛けた折²⁾、開祖覚明行者から「岩崎竹之山に御嶽大権現を勧請すべし」との霊夢があり、万延元年（1860）岩崎御嶽山が開かれたとされる。実際、本社殿前には「心願講惣同行中 勧進者 出来町 大和屋宇兵衛」（右面）・「萬延元庚申年 松高山廿一世上人 願啓」（背面）³⁾と刻まれた石柱が今も残る。

現在、岩崎御嶽山の山自体は単独、山頂の岩崎御嶽社は旧村社の白山宮（日進市本郷）の境外社の所属となっている。また心願講祖の明寛・明心が開山したこともあり、心願講員にとっての主要霊場となっている。前出の石柱にも、「當村惣取持」（左面）と刻銘されており、古くから「岩崎（村）＝心願講の拠点」として人々に親しまれてきたようである。現在は岩崎地区民からなる岩崎心願講が付属し、現講社長は岩崎町在住の河出一夫第十八世先達（83歳）である。

2、岩崎御嶽山霊神場に集う人々

御嶽信仰に特有の霊神碑を祀った霊神場は、岩崎御嶽山の全体を覆うように広がり、現在把握されているだけで493ヶ所ある。霊神碑とは、御嶽行者が死後「霊神」となるとされその霊神号を記した石碑のことであり、一般的には亡くなった行者の遺徳を偲んで講社の人々が記念碑的に建てるものである。納骨などはしないが亡くなった行者の靈魂を霊神として祀るための「依り代」の働きもする。この「依り代」でもあるという考え方から、「前座」（精霊統御者）が霊神を「中座」（憑坐）に降ろして託宣を聞く御座儀礼が霊神碑の前で行われるようになったのであろう。また、靈魂祭祀の場として霊神碑が御嶽山内に建てられているのは、御嶽山自体が地獄谷や賽の河原などを配する、死後霊の往く場所とみなされていたからだと考えられている（児玉1976: 194）。

岩崎御嶽山に霊神場を所有する講社は、心願講だけではなく、誕生講・福寿講・出生講・宮丸講・明栄講など中部地区で特に有力とされている講社をはじめとして多数ある。これはこの岩崎御嶽山が心願講の拠点というだけでなく、中部地区

の御嶽信仰全体の拠点のひとつであることを示している。

霊神場所有講社の多くは、霊神場で霊神を供養するための供養祭を年に1～2度は行う。それゆえ、年間かなりの数の講社が岩崎御嶽山に訪れていると考えられる。さらに霊神碑自体は個人別に造られている場合が多く、講社での集団参拝とは別に墓参するように個人でやって来る人もいる。

例えば、中部地区最大の規模を誇る明栄講の分派教会のひとつ、明栄講ろ組教会（海部郡七宝町）は、毎年6月と11月の第3日曜日に行者・講員が大型バスで来山し、岩崎御嶽山に所有する2ヶ所の霊神場で講祖の徳開霊神らの碑を前に勤行や御座儀礼を行う。

このように、岩崎御嶽山は霊神場の所有ということを通じて、心願講だけにとどまらない多種の御嶽講社が参集する霊場となっている。それゆえ心願講が多く分布する名古屋市東部から以東の地域とそこから南下した西三河地域⁴⁾以外からも多くの信者が集まり、その信仰圏はかなり広いと考えられる。試みに岩崎御嶽社の改修築・新築工事の間（平成元年～3年）に御嶽社造営委員会が記録した造営に伴う寄付金芳名帳⁵⁾から寄付者の住所を調べてみると、心願講が集中する尾東や三河地域はやはり上位にあるが、全803口の寄付のうち最も多いのは寄付全体の46%を占める名古屋市内（16区）からで、その中でも西区や北区など心願講以外の講社が分布する地域からの寄付が特に多くなっている。また明栄講系が集まる海部郡（5%）や、誕生講のある春日井市（3%）などからも比較的多く、心願講以外の講社や信者も造営にかなり貢献したことがわかる。

以上のようなことから、岩崎御嶽山には、日進市内やその周囲の市町村・心願講分布地域にとどまらず、霊神場所有を通じて他講社や個人信者までが訪れる霊場であることが推察される。まさにこの山は、霊魂祭祀の場・死者供養の場として行者・講員の信仰を基層で支える空間の1つになっているのである。

3、岩崎御嶽山を支える人たち

(1) 岩崎御嶽山直属の2つの組織

現在、岩崎御嶽山頂の御嶽社は近隣の白山宮の境外社であり、神社本庁に属す

神社神道である。しかしながら、御嶽社に宮司が常駐しているわけではなく、実際に岩崎御嶽山と御嶽社を維持・運営しているのは岩崎心願講と岩崎御嶽山行者会である。通いではあるが毎日常駐しているのは現岩崎心願講社長の十八世河出氏であり、このように常駐が求められる点でも、一部の例外を除き基本的に代々の社長は岩崎町在住者と決まっている⁶⁾。

岩崎心願講は岩崎地区民の心願講組織であり、岩崎御嶽山行者会（以下、行者会）は岩崎御嶽山を心願講全体の根拠地とみる日進市外から集まった心願講の行者衆組織である。行者会は、平成に入ってから、御嶽行者として卓越した法力や人格を備えていた先代（第十七世牧秀雄氏、2000年没）が興し、先代の死後も彼の徳を慕う弟子たちを中心にして今なお存続している。岩崎心願講は地縁によって結ばれた講集団であり、他方、行者会は一定の地域の枠を越えた同信的な集団であるといえるであろう。年中行事に関しては岩崎心願講が行うものと行者会で行うものと一応の区別はあるが、行者会が主催する祭礼がそのまま岩崎心願講の祭礼と同化していたり、本来岩崎心願講の行事である月次祭に行者会のメンバーが参加したりするなど、両組織の行事は今や渾然一体となっている。

(2) 岩崎心願講と岩崎地区民

岩崎心願講は地元民による組織であることから、毎日のお勤めや月ごとの月次祭・大祭などで活動することのほかにも、御嶽社を清掃・維持・管理するという雑務一般も担っている。また神事の伶人（楽人）として箏篳や笙・龍笛の奏者として貢献する講員たちもいる。

岩崎心願講の構成員は、大まかに先達（行者）と講員とに分けられるが、現在岩崎心願講専属の行者は講社長の河出氏以外に存在せず、行者会所属のメンバーがそれを補っているといった状況である。それゆえ岩崎心願講の行事である月次祭では御座儀礼はなく、もっぱら経本を読誦するのみとなっている。また行者会とは別日程で行っている岩崎心願講の木曾への夏山・寒山参拝にも行者の姿はほとんど見られず、木曾へ参拝しても御座儀礼がないというのが現況である（今夏の夏山は河出氏と行者会のY氏の2人のみが行者として参加した）。木曾の御嶽講を調査した池上広正氏は、御嶽講が御座を欠いた場合、祝詞・経典を読むだけ

の村氏神の祭りに近い神事活動へと変質すると述べているが（池上1991）、岩崎の場合も同様の傾向が見られる。

講員はほぼ全員が岩崎町在住者であり、殆どは定年退職した（あるいはその年代の夫を持つ）年配者である。男女比では若干女性が多い。積極的に年中行事に参加し信仰活動として講社に関わる人と、大祭や木曾への登拝（日帰り遥拝）といった大きな行事があるときのみ参加するといった不定期的なメンバーの両方がある。また講員でありながらもその意識がきわめて希薄で、地域住民として半ば義理的に参加している講員も見られる。毎月の月次祭に参加している講員の数は平均3人程度であり、これが大祭や登拝といった大きな行事になると30人くらいに増えるという具合である。大祭や登拝などリクリエーション的要素が強いものには気軽に参加できるが、そういった要素もなくただ小一時間経本をひたすら読誦するといった、ある程度の宗教的意思がないと行えないような行事には参加者が少ないというのが現状ではなかろうか。

同じ岩崎地区民からの成る組織として、岩崎御嶽社崇敬者総代という、岩崎御嶽山の御嶽社と山そのものを維持するための地元の組織もある。これは一般的な地域の「氏神—氏子」関係の組織と近いものである。

この崇敬者総代を構成しているのが岩崎区長を長とする岩崎区議会議員（男性23名、非選挙）で、岩崎区議会議員になると自動的に岩崎御嶽社崇敬者総代になるというシステムになっている。それゆえ、宗教的というよりはむしろ行政的性格が強い組織で、“崇敬者”とあっても宗教色の強い月次祭などの行事には出席せず、大祭など公共的性の高い行事だけに参加する議員が多い。大祭の折には事前の事務的手続きから当日の会場設営・進行に至るまで⁷⁾、祭礼を円滑に執り行うための実行委員的役割を果たしている。そしてこれに岩崎財産区委員長・自治会長・奉賛会・信徒総代などの緒組織が続き、全体で岩崎御嶽山を維持・運営しているのである。ある区議会議員（72歳）は「（儀礼を）やっとなるのは行者だけでも責任は区議会にある。その行者と岩崎の間の取次ぎをするのが（岩崎住民で社長の）河出さんだわ」と岩崎御嶽山の行事において岩崎区議会の役割が非常に大きいことを語っている。

上述のもののほか、毎日2名の岩崎地区民が岩崎御嶽山に当番制で手伝いに来

ている。岩崎心願講員・非講員に関わらず70代前後の年配者が、朝8時から夕方5時まで本社殿・開祖殿・社務所・霊神場など全山の清掃や、参拝客へのお札の販売・接待など行っている。週2回の賽銭回収も任される⁸⁾。昼食は持参で日給2千円が岩崎地区から振込式で支給されるという。「当番人＝岩崎心願講員」というわけではないため、当番には来ているが御嶽信仰に全く興味がないという人もいる⁹⁾。ボランティア制ではなく日給制を採っているのもその辺りの事情と関係していると思われる。

このように当番制の人たちが日常的に御嶽社と山を清掃・維持するほかに、岩崎地区民で構成された岩崎御嶽社奉賛会が毎月最終日曜日の朝8時から正午ごろまで全山の大清掃を行っている。毎回30名前後の奉賛会員の参加があり心願講行者衆は参加しない。また、6月と12月の最終日曜日には大祓いとしてさらに規模の大きい清掃活動を行っている。

この奉賛会は、昭和62年に岩崎区・岩崎財産区が中心となって完成した岩崎城竣工後¹⁰⁾、築城に協力してきた地元の有志たちで翌年結成されたという。この時の様子を語る奉賛会員(70代男性)は「『城やったついでに(同じ岩崎の歴史的遺産である)御嶽山の整備に行くか』という勢いで結成された」と語る。そして結成1年後の平成元年には岩崎御嶽社の改修築・新築工事が着工され、平成3年には本殿・開祖殿をはじめとする多くの施設が一新された。この行動力と協力体勢が今日の岩崎御嶽山をなしているといっても過言ではない。またこの奉賛会の中からさらに7、8名の有志が集まり岩崎御嶽山内にある霊神場の数を調査し「岩崎御嶽社霊神場見取図」およびその「台帳」が作成された。平成5年ごろから有志たちの実測が始まり、平成13年まで約8年間の歳月をかけ完成したという。

このように、岩崎心願講や岩崎地区に住む人たちの尽力により岩崎御嶽山が維持されてきたことは明らかであるが、なぜ岩崎地区の多くの人々が岩崎御嶽山に集まり各種行事に参加し、また協力しようとするのであろうか。最後に、岩崎御嶽山に関わっている地区民への聞き取り調査の内容を紹介しつつその理由を考えてみることにする。

[事例① 70代女性講員]

岩崎町出身。祖父が岩崎心願講の第三世先達覚弘霊神(志水重太郎氏)。結

婚後名古屋市内に長く住んでいたが、諸事情でたまたま岩崎に戻って来た。「(祖父によって岩崎に) 呼び戻されちゃったと思う。先祖がやとった人は不思議とやらざるをえん状況になるんだね。せっかく近くに住んでるしお世話できることはしたい」。

[事例② 70代女性講員]

先代第十七世先達(牧秀雄氏)の実妹。岩崎心願講の第九世覚信霊神(牧信一氏)に幼少の頃から御嶽山のことをいろいろ教わった。「(岩崎御嶽社まで) 来られる体であることがほんとありがたい。家では足腰が動かんけど、ここに来るとほいほいと体が動くから不思議」、「(霊神碑前で「般若心経」をあげた後) 拜んであげなきゃみんな寂しがるもんね」。

[事例③ 70代男性区議会員]

岩崎城建設や岩崎御嶽社の改修工事で尽力。定年退職後は伶人の筆簞奏者として岩崎御嶽社で活躍してきたが体力の衰えを感じ先ごろ現役奏者を引退。現在後輩の育成にあたる。「先代の秀雄さんに筆簞や御嶽山に関わる歴史などいろいろなことを教えてもらった。(短歌集)の『歌集筆簞』(自費出版、2000)を出版できたのも秀雄さんと出会ったから。私は宗教心みたいなのはあんまりないけど、秀雄さんに恩返しをしたい。7年後(2010)に岩崎御嶽山の開山150周年。生きとれるかわからんけど、その時まで岩崎御嶽山のことを本にしたい」。

[事例④ 70代男性区議会員・責任総代]

「ずっと冬・夏の登拝で幹事をしてる。夏山が毎年8月1日なのは長年の気象データを調べて雨が降りにくい日となってるから選んでる。皆さんがいい天気を楽しんでもらえると嬉しい」。

[事例⑤ 70代女性講員]

「(当番は) たーのしいヨ! お弁当持ってきて外で食べたりして遠足気分。月2回来れば4千円もらえる。いいお小遣い。娘時代は戦争でいいことなかったけど今は楽しい」

以上の聞き取りも合わせて、岩崎地区民が御嶽山に集まり行事に協力する理由を考察してみると大まかに2つの理由が存在すると思われる。1つには信仰面からであり、自分の親類縁者がかつて行者であった人がその霊神を供養するために

訪れるということ。2つには地縁面からであり、築城工事と同様に岩崎地域の文化保全のために協力するということや、社会参加の一環として関わり、(義理立ての人もいるが)地域の役に立つことで充実感を得ている人がいるということである。そしてきっかけがどちらの場合であっても岩崎御嶽山に関わるのが「生きがい」となっているように思われる。岩崎御嶽山に積極的に関わっている人たちの平均年齢が70代半ばであるということから、社会の一線を退いた高齢者たちの新たな活躍の場になっているのであろう。

(3) 岩崎御嶽山行者会

岩崎御嶽山行者会は10名ほど(うち女性4人)の組織で岩崎御嶽山を心願講全体の拠点として日進市外から集まった行者から結成されている。それぞれ自宅に近い心願講社の行者でありながら同時に岩崎御嶽山にも通っている人たちである。定期行事としては毎月の朔日祭と、第4金曜日の夜に行者の所作などを学ぶ学習会の2つである。

行者会の代表は、先代の一番弟子であったS氏(40代男性、名古屋市中村区在住)で、地元中村区に所属講社があるが、先代と木曾で出会いその優れた法力に憧れて岩崎御嶽山にも来るようになったという¹⁾。彼のほかにも高針心願講(名古屋市名東区)の有名行者であったO氏の親戚で高針心願講に属しながらも岩崎に来山する男性や、刈谷市の心願講社から岩崎に移ってきた行歴15年の男性行者もいる。心願講の拠点であるという理由以外に彼らが遠方から岩崎御嶽山に奉仕する最大の理由は、行者会を設立した先代の牧氏の熱狂的な弟子であったということがある。先代の死後もその恩徳を偲んで岩崎に参集し、行を続けているのである。これは御嶽信仰の死者供養の意識とも関係している。

彼らは遠方在住で日常的に岩崎に関わることはできない。岩崎御嶽山ひいては心願講全体としての行法・法力の継承がその主な務めであると考えられる。それゆえ、その辺りの事情を解している岩崎地区の人たちは、行者に雑務に当たるような仕事を任せることはない。行者が修行に集中できるような環境を作り、彼らをサポートしているといつてよい。行者がおらず儀礼では行者会頼みの岩崎心願講社と、日常的な維持を自分たちはできず岩崎心願講に頼る行者会というように、

両者が補完し合うように結びついているのである。

(4) 岩崎御嶽山以外の心願講行者

岩崎御嶽山には岩崎心願講・岩崎御嶽山行者会をさらに扶助する組織がある。その代表講社が隣接する愛知郡長久手町にある岩作（やさご）心願講と、豊田市の古瀬間心願講であり、春・秋の大祭、夏の霊神祭の「お勤め」（勤行と御座）を中心とした大行事の手助けをする。逆に両講社が大祭をする際は岩崎心願講と行者会が扶助に回り互助関係となっている。このほかに同じく近隣にある尾張旭心願講、愛知郡東郷町の和合・諸輪心願講、豊田市の明和心願講なども互いに協力し合う態勢がある。こうした互助関係で岩崎の大祭では毎回20名以上の外来行者が参加している。儀礼の中でもとりわけ重要視される御座儀礼も、御座技能を持った行者がいない岩崎心願講に代わり、他の心願講社の行者が行ったりする¹²⁾。

特筆すべきは、岩崎御嶽山行者会のメンバー同様、地域の所属講社を越えて心願講行者が講社間を行き来しているという点である。実はこの傾向はかなり昔から心願講、ひいては御嶽講全体の基本的傾向としてあったようである。木曾御嶽山のある西筑摩郡内の御嶽講の実体を調査した池上広正氏は、太子講・念仏講・庚申講などが部落や区・組という狭い地域社会の在住者に局限されているのと違い、御嶽講では行者が各地域を廻り一定の地縁の範囲を越えて組織をなしていると指摘している（池上1991）。また、1981年「御嶽講集団と地域組織」と題し¹³⁾、岩崎御嶽山を事例に心願講組織を分析した赤池憲昭氏は、その当時およびそれよりかなり以前の戦後直後くらいから、心願講の先達（行者）には、①所属する地元の単位講社で世話人や一般講員を指導する宗教的指導者の立場と、②同業の専門家集団である（心願講の全体の）先達集団の一員としての立場という2つの顔が見られ、②のような職能集団としての先達衆による講社間の行き来が活発であることを指摘している。そしてその職能集団は随意的なもので実質的な組織構造を持たないとしている。

この論考の中で赤池氏は、行者の流動性の原因を心願講が地盤としている地域の都市化に見ており、交通網の発達などを例に挙げている。そして1980年代当時を、流動的に活動する心願講先達（行者）集団の「発生期の過渡的段階にある」

とし、各講社から集まった先達（行者）集団（②の集団）が、今後「集団としての凝集化を進め一定の教团的體質を獲得するようになるか、あるいは逆に先達間の拡散ないし先達自体の激減による分解・消滅の方向に向かうのかは現在のところたやすく予測はできない」と結んでいる。

それから20年以上が経過した現在、結果的には、氏が予測したように、当時流動的に活動していた職能集団としての先達（行者）が、平成に入り先代の牧氏によって「凝集化」され、岩崎御嶽山行者会となっている。しかしそれが「教团的體質を獲得する」までには至っておらず、また、行者の数は減っているものの分解・消滅といった事態も今のところ起こってはいない。

以上のように、岩崎御嶽山は、岩崎心願講や岩崎御嶽山行者会によって維持されるだけでなく、近隣の心願講社の行者によっても支えられていることがわかった。互助関係にある心願講社は、大祭でのお勤めに参列するのはもちろんのこと、参加する際の寄付金持参などで金銭的な協力もしている¹⁰⁾。しかしながら、行者会が心願講の拠点という岩崎御嶽山のもつ特殊性に基づいて扶助するのは違い、これら近隣の講社は日進市周辺の心願講組織がもつ相互扶助の伝統に基づいて「慣習的に」扶助しているにすぎないようである。

まとめ

以上、御嶽信仰の基層組織の実態を、岩崎御嶽山の例をもとに明らかにしてきた。岩崎御嶽山が地元の岩崎心願講や岩崎御嶽山行者会、地区民の尽力によってだけでなく、霊神場を所有する市外のお講社や個人信者、近隣の心願講社の協力によっても成り立っているという実態が明らかになった。また、これら多様な組織や人々が岩崎に来山する理由は、①霊神場を所有し供養を行う、②死後霊神となった行者に報いて行をする・奉仕する、③地域に貢献する、④社会参加の場を見つける、⑤講社間の互助関係を維持するなど、それぞれの立場や思考によってさまざまである。そして、このような個々の思いが有機的に結びついた結果、岩崎御嶽山というひとつの霊場が今日も維持されているのである。

今回は岩崎御嶽山の事例のみを取り扱ったが、全国に散在するこうした1つ1

つの基層組織や単位講社の活動が御嶽教団の基盤にあるため、上部団体の統制が特に強くなくとも、総体としての「御嶽信仰」が今なお存続されているということが言えるのではなかろうか。

注釈

- 1) 「岩崎御嶽社霊神場台帳」(岩崎御嶽社霊神場調査委員会、平成13年3月3日作成)より。
- 2) 縁起には何番札所の寺院なのかは記されていないが、行者の話の多くは結願霊場である谷汲山華嚴寺(岐阜県)であると答える。
- 3) 松高山とは岩崎町神明の大応寺(浄土宗)の山号であり、この寺の二十一願誉賢瑞の助力を得て開山にこぎつけたといわれている。寺内の奥手には「岩崎御嶽山開祖 明寛行者之堂」もある。
- 4) 講祖明寛行者が小間物商で、名古屋から三河地域に至るまでの広範囲を行商していたという経緯などもあり、特に旧愛知郡(日進・東郷・長久手)・尾張旭市・瀬戸市などの尾張東部、三好町・豊田市・岡崎市・刈谷市などの西三河、さらに南部の知多市や常滑市の地域知多市や常滑市の地域に多い。
- 5) 「岩崎御嶽社 寄付者御芳名 御嶽社造営委員会(平成元年4月～平成3年12月末)」
- 6) 河出氏は御嶽山ではなく高野山で修行を行っており先代から直接法力を継いだ弟子ではないが、先代が亡くなる直前、本人から直接口頭で後任を託されたという。常駐するというきまりから、行法の面よりも岩崎在住者ですでに定年退職者であるということが重視されたようである。
- 7) 春・夏・秋の大祭では、午前中に御嶽社自体の神事が行われ、午後から心願講の行者・講員によるお勤めが始まる。岩崎区議員が主に関わるのは午前の神事であり、そこの司会進行役は区議員が行う。
- 8) 回収した賽銭を岩崎公民館へ運ぶ担当者も1年交代で決まっており、着服しないであろうという信用を地区から受けた人が代々選ばれているという。
- 9) 当番人の1人であるMさん(70代)は、「地域で頼まれるで仕方ない。御嶽のことはよくわからん」とこぼす。
- 10) 岩崎城は享禄年間(1528-1532)織田信秀の持ち城であり、その後丹羽氏清が城主となり、丹羽氏が60余年在城した。天正12年(1584)に小牧・長久手の戦いで羽柴秀吉方の池田隊に攻撃されて全員討死、城も廃城となった。しかしその後も古城址は残り、昭和59年、岩崎区民の要望からこの古城址を整備しなおし城址公園として保存することになった。さらにその後、昭和61年に岩崎区と岩崎財産区は岩崎城建設委員会を結成し、

城郭そのものの建築にも着工した。

- 11) 行法の上ではS氏が先代の一番弟子であり優れた行者ではあるが、岩崎在住者でないことや日中仕事を持っているという点で現先達（社長）になることは不可能だったようである。
- 12) 今夏の霊神祭・秋の大祭では御座の「前座」（精霊統御者）が岩崎御嶽山行者会のO氏、「中座」（憑坐）が名古屋市東区矢田心願講のT氏であった。
- 13) 赤池憲昭「御嶽講集団と地域社会」、『日本のシャーマニズムに関する研究調査』、昭和51年度科学研究費補助金—総合A—研究成果報告、1981。
- 14) 一般的な大祭では、岩作・古瀬間・尾張旭・和合・諸輪・明和・三好新屋などの各講社が5千円程度の寄付をしており、互助関係にある近隣の心願講社の中での相場があるようである。

参考文献

- 赤池憲昭「御嶽講集団と地域社会」、『日本のシャーマニズムに関する研究調査』、昭和五十五年科学研究費補助金—総合研究A—研究成果報告、1981。
- 池上広正『宗教民俗学の研究』、池上廣正先生著作刊行会、名著出版、1991。
- 生駒勘七「御嶽信仰の成立と御嶽講」、鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』、名著出版、1978。
- 児玉允「木曾御嶽の霊神碑」、鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』、名著出版、1976。
- 桜井徳太郎『講集団の研究』、吉川弘文館、1988。
- 菅原壽清『木曾御嶽信仰—宗教人類学的研究—』、岩田書院、2002。
- 菅原壽清「木曾御嶽教における霊神信仰」、『宗教学論集』第11輯、駒沢大学宗教学研究會、1982。
- 菅原壽清「木曾御嶽教における霊神碑」、『民俗宗教』第4集、東京堂出版、1993。
- 西海賢二ほか『木曾御嶽本教五十年のあゆみ』、木曾御嶽本教、1997。
- 日進町誌編纂委員会『日進町誌 本文編』、1983。
- 岩崎誌編纂委員会『岩崎誌』、1985。

（さかきばら なおこ 比較人文学）